編集後記

8月29～30日の2日間にわたり、JOIは会員企業の方々とともに湯河原の研修施設で、ガスTSOシステム、電力TSO・ISOの送電管理、水素ガス流通などエネルギー流通を学ぶ合宿研修を開催しました。合宿研修には、総合商社、建設会社、弁護士事務所から主に中堅社員の方々が参加されました。当日は、海外電力事業に携わる志の高い方々に向けて、京都大学特任教授の内藤先生が迫力と熱意あふれる講義を展開され、また参会者同士で質の高い議論が幾度も行われ、夕食会やその後のフォローアップセッションを経て、密度の濃い2日間を過ごすことができました。参加者の方々には、志をともにする仲間と会社の枠組みを超えて絆を構築する有意義な学びの機会を提供できたのでないかと思っています。

今号の特集で取り扱った米国のエネルギー事情も、JOI会員企業の関心が非常に高い分野です。アメリカに根を張って再生可能エネルギー、エネルギー貯蔵、分散電源管理などのリサーチをされているクリーンエネルギー研究所の阪口代表やハワイ大学で環境・エネルギー経済学を研究されている樽井先生などから、読み応えのある寄稿を頂いております。特集記事が会員企業の事業展開に少しでも参考になれば幸いですし、またこれらの分野で焦点を絞り込んだ合宿研修やセミナーなども引き続き企画して、会員の皆様から評価されるさまざまなサービスを提供して参ります。

常務理事　田丸伸介

海外投融資
Vol.31 No.5（通巻185号）
2022年9月22日発行

発　　行
一般財団法人　海外投融資情報財団

発 行 人
東 浩
〒102-0073
東京都千代田区九段北二丁目
3番6号　九段北二丁目ビル
TEL. 03-5210-3311（代）
URL. www.joi.or.jp

制作協力
（株）エディポック

＊本誌に掲載されている記事の内容や意見は、海外投融資情報財団の公式見解を示すものではありません。

●禁　無断転載

All rights reserved. No part of this magazine may be reproduced in any form or in any means without written permission from the publisher. ©Japan Institute for Overseas Investment Printed in Japan

九段だより　半世紀の歳月

大阪モノレールで万博記念公園に向かうと、金の円板を戴く白い異形の建築物、半世紀の間、立ち続けている「太陽の塔」が遠景から現れます。

幼少期以降、70mもある唇を尖らせた塔をしばしば訪れました。奈良の大仏の高さが15mであり、その4個分を超えるサイズ感があることは直感的には腑に落ちませんが、大仏が想定外に小さいのかもしれません。

しばらく大阪を離れており、内部は見られないとばかり思いこんでいましたが、2018年3月より内部が一般公開されていました。あらためて調べてみると、「当初は、万博終了後保存予定でなかったところが撤去反対署名運動などを背景に存続した」とか、「2000年頃に期間限定で部分公開がされるも、根本的な補修が必要となっていくなか、そもそも保存できないのではとの議論もあった」など、紆余曲折があったようですが、最終的に抜本的に整備する方針となり、2018年の一般公開に至ったとのこと。

今夏、大阪の往訪のタイミングで予約が取れ、初めて、内部を見学することができました。

整備された内部は万博当時をすべて再現したものではないものの、第4の顔である「地底の太陽」(外部に、頂部の「黄金の顔」、正面の「太陽の顔」、背面の「黒い太陽」と、3つの顔をもつ）が入口部分に展示されており、復元された生命の樹に沿って、1階のアメーバーなどの原生生物から始まり、恐竜、爬虫類などを経て、初期哺乳類、猿、人類に至る進化の過程を、階段を昇りながらたどり、最上層部で天空に向く円錐の両腕の内部を観察することができます。

特殊構造の塔の中に、見学通路を設置（当時はエスカレータ）しながら、50m近い生命の樹を建て、300体弱の生物を配置できた当時の建設技術にも感嘆させられます。

製作者の岡本太郎は、日本人は「勤勉で純粋だが、底抜けの豊かさに欠けて」おり、「ベラボー」な太陽の塔をつきつけたと書いています(注)。かかる文脈を受け、文明のアンチテーゼなどさまざまな解釈の試行がありますが、言葉を駆使して解釈を追求するより、縄文テイストの飄々とした風情で、半世紀にわたり多くの人々に慕われてきた、その存在そのものに愛着をもつことが本来の行きつくところと考えられます。

2025年に夢洲にて「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに大阪・関西万博が開催され、未来を見据えた技術・社会文化の国際交流の場となろうと思います。来訪した海外の人々に、少し足を延ばして、半世紀の歳月を越え日本社会に根づいた「ベラボー」な芸術作品に触れてもらうことを期待する次第です。

(注) 出典：「岡本太郎・EXPO'70　太陽の塔からのメッセージ」

専務理事　東 浩